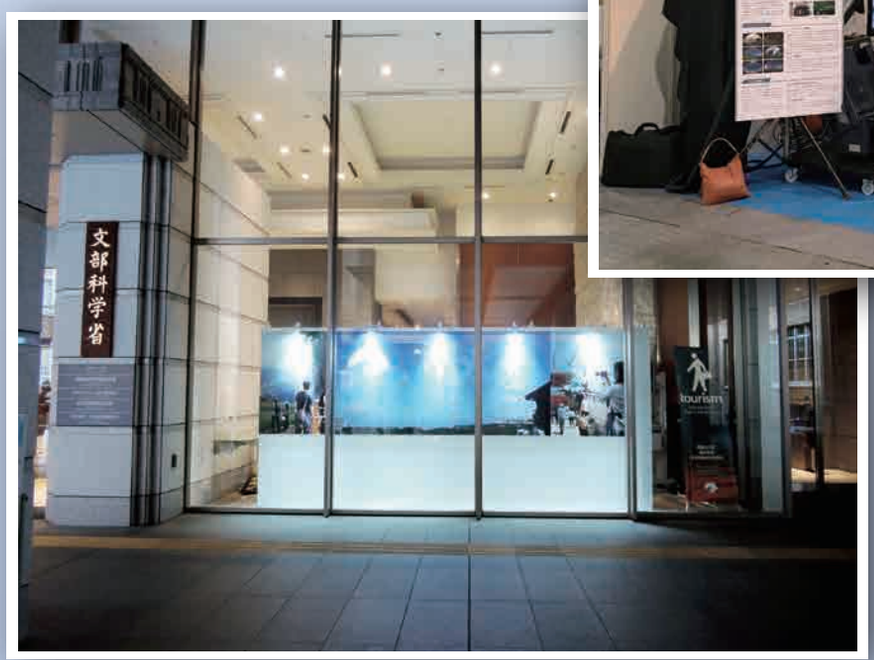
# Wakayama University Tourism Update

## Semiannual Newsletter of Tourism Education & Practice

WTU　Autumn/Winter 2019

ツーリズム EXPO ジャパン 2019 出展
（2019.10.24－27 ／関連記事：８ページ）




文部科学省エントランス企画展示
「和歌山大学がつくる新しい観光学」実施
（2019.10.1－11.11 ／関連記事：８ページ）

## Contents　－目次－

1. Reports　－和歌山大学観光学部生の国際 / 地域活動報告を紹介－
2. Topics　－過去のイベントとニュース－
3. Future Events　－今後のイベント紹介－

## ■ G20 大阪サミット学生通訳ボランティア　参加報告

南　裕賀さん（学部２年生／和歌山県立新宮高等学校出身）

2019 年 6 月 28 日、29 日に G20 大阪サミットが開催されました。大阪、和歌山の大学から 36 名の学生通訳ボランティアが集まり、私もボランティアの一員と参加させていただきました。今回、ボランティアの活動内容、学んだこと、感じたことについて報告致します。

学生通訳ボランティアの役割は、海外の報道関係者に対して大阪・関西の魅力を発信することでした。G20 大阪サミットの会場、インテックス大阪には大阪・関西魅力発信スペースが設置され、未来や小料理屋をイメージしたブースが設けられていました。私は、茶室のブースを担当させていただきました。茶室のブースでは、裏千家により抹茶や干菓子が提供され、海外の報道関係者に日本のお茶文化を体験していただきました。通訳ボランティアの主な活動内容は、勧誘、お点前や茶道具の説明､感想を聞くということでした。また､茶室を取材する海外メディアの対応、裏千家の方を通しての通訳活動も行いました。

ボランティア活動を行うことも初めてで、通訳を行うことも初めての経験でした。2 回の事前研修を受け、通訳ボランティアの準備を少しずつ進めていました。茶道の基礎知識も事前に少し勉強しました。研修のおかげもあり、茶道を体験していただけるように積極的に話しかけ、茶道の基礎的な内容は説明することが出来ました。しかし、通訳をしているときに英語に訳すことだけに集中してしまい、笑顔で対応することが出来ませんでした。また、海外の方の英語が一部聞き取れなかったり、意味が理解できなかったりして、話がかみ合わないことがありました。自分の英語力の低さを痛感し、まだまだ勉強が必要だと感じました。

このような国際的な場で、学生通訳ボランティアとして、日本文化を紹介できることは非常に光栄であり、貴重な体験でした。中国の報道関係者の方は、「自分の国のお茶文化とは異なり、興味深い」とおっしゃっていました。日本の伝統文化の素晴らしさについて改めて実感し、誇りに感じました。もし、今後このような国際的なイベントに関われる機会があれば、ぜひ参加したいです。

今回の機会をいただいた観光実践教育サポートオフィス、2019 年 G20 大阪サミット関西推進協力協議会、サポートをしてくださった大阪国際交流センター、大阪府国際交流財団に心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

https://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/news/2019072400012/

## ■ ASEAN+3 ツーリズムユースサミット　参加報告

小滝　侑さん（学部４年生／初芝富田林高等学校（大阪府）出身）

2019 年 8 月 25 日から 30 日にかけて行われた、ASEAN+3 ツーリズムユースサミットへ参加した。このサミットは 2013 年、ASEAN 諸国との合意によって始まり、毎年行われるイベントで、今回の開催地はタイ・チェンマイであった。毎年異なるテーマをもとにアクティビティや会議内容が組まれ､2019 年の今年は､「For Innovation, Organic and CBT Tourism　Development」のテーマに基づいて行われた。具体的には、コミュニティーベースで観光（CBT）が行われているような場所を訪問してアクティビティをしたり、ミーティングでは観光産業における持続可能性などが話し合われた。

今回体験したタイ･チェンマイでの持続可能性を試みる取り組みに関するアクティビティ、ミーティング内容などを抜粋して紹介させていただきたい。

①日本食レストラン「天国」

チェンマイにある日本食レストラン天国。ここは、ただ日本食を提供しているレストランではなく、 廃棄物を肥料や虫よけ薬剤にして再利用しているレストランである。北海道に廃棄物削減に取り組　む会社があり、そこでは廃棄物が発酵したものを燃料として、発電を行っており、その方法を真似　てできた液体が肥料や虫よけ効果を有しているようだ。これにより有機栽培も可能になり、同時に　ごみ排出量の削減に貢献しているようだ。

②Elephant Farm 訪問、動物保護と観光の両立に関する学習

タイではゾウは文化的に大切な動物として扱われている。一方で、その個体数は減少の一途をたどっている。その原因として地雷による死傷、交通事故などがあげられるようだ。このような身体的、精神的に傷ついたゾウの保護をしている施設に今回お邪魔させていただいた。この施設が観光施設として開放する理由は、ゾウに関することを観光客に周知させること、また多額の資金が必要なゾウの保護に費用を当てるためである。人間の活動によって傷ついた生態系の保護が必要なっている現実が垣間見られた。

③モックアップミーティング

最終日、前日までのアクティビティを踏まえ最終会合が行われた。ここではそれぞれの国、学生や若者が持続可能な観光開発や CBT 分野においてどのような活動をしているのか、また将来各国がどのような関わりを持ってこのような活動を続けていくべきかが話し合われた。

他にも日本での取り組みとはまた異なったアプローチで CBT を進めている観光地があったり、中にはコーディネーターがいる観光地もあり、大変興味深かった。

また、参加学生全員が英語を話せ、観光分野に関する意見をしっかりと持っていた。このような他国の代表学生に非常にインスパイアされた。今回のサミットで一番有意義であったのが、彼らとの交流であった。

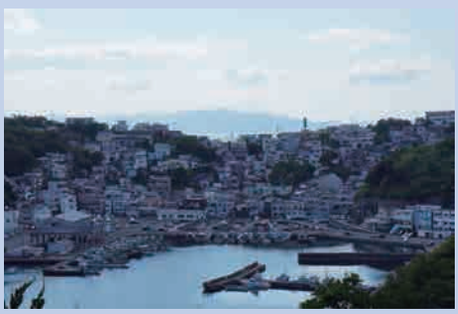
将来このサミットに参加したいと思う学生には強くお勧めしたい内容であった。

## ■ 大学生観光まちづくりコンテスト 2019　訪日インバウンドステージ

### 藤井　優希さん（学部１年生／愛媛県立川之江高等学校出身）

皆さんは和歌山市にある雑賀崎地区を知っていますか？雑賀崎地区は歴史ある漁村であり、魚を捌くために使われていた屋外水道や井戸、そして狭く、迷路のような路地が昔ながらの雰囲気を感じさせます。また、「はたうり」と呼ばれる、漁師さん（またはその奥さん）から直接魚を購入できる珍しい取り組みがあります。市場に出荷される前の新鮮な魚を格安で購入できることが一番のポイントであり、地元の方や、ファンの方々に愛されている取り組みとなっています。

私は大学生観光まちづくりコンテスト 2019 訪日インバウンドステージにチームで参加しました。このコンテストは、単なるツアー企画を提案するのではなく、対象地域を設定し、外国人観光客を誘客することでその地域が活性化するような観光まちづくりプランを策定するという内容です。結果としては、残念ながら本選への参加は叶わなかったのですが、ポスターセッションのチームに選ばれて東京で発表を行い、私たちの作ったプランに対して、多くの方からご意見をいただくことができました。



５月の末に雑賀崎と加太を訪れ、雑賀崎に多くの可能性を感じ、対象地域とすることを決めました。その後、雑賀崎を何度も訪れて地域の方へのヒアリング調査を実施するとともに、チーム内での議論を深めていきました。一年生のみのチームだったため、専門的な知識が欠けていたり、まだまだ自分自身の考えが定まらない中で悩んだりと苦難も多くありましたが、チームでの議論や独自の学び、サポートしていただいた先生方のアドバイスを活かして、私たちの考える観光まちづくりプランを形にすることができました。

今回、観光まちづくりプランの作成と東京での発表を通して、観光まちづくりの奥深さを知ることができました。誰目線でプランを作るのか、何を重視して作るのか等によって様々なプランを作ることができるが、一番重要なのは「実現性」と「実行力」であると感じました。そこで、コンテストに出場したメンバーを中心として、今後も継続して雑賀崎での活動を行っていくことを決めました。今後は今回作ったプランを基に、住民の方々の意見も伺いながら、雑賀崎の目指す将来像を考え、学生ができることを実行していきます。地域の方々とともに、一歩一歩着実に雑賀崎地区が観光によって元気を取り戻すお手伝いができればよいと考えています。

## ■ プロジェクト自主演習「2019 年度観光学部宿泊研修運営プロジェクト」

天田　南葵さん（学部 2 年生／徳島県立城南高等学校出身）

「人生最後の修学旅行だね。」高校 2 年生の修学旅行最終日、友人とそんなことを話した気がする。日本の多くの大学生は、大学生の修学旅行というものを経験せず社会に出る、と言っても過言ではないだろう。私たち和歌山大学観光学部生を除いては。

和歌山大学観光学部の宿泊研修は、中学や高校の修学旅行とは少し違う。これはツアー会社が企画したものではなく、プロのツアーガイドがいるわけでもない。企画・運営者はともに有志の 2 回生スタッフである。この宿泊研修の目的は、和歌山を知ること、そして観光学部生としての自覚を持つことだが、それ以外にも、今後の学びに活かせる経験や、友人たちとの思い出が得られる。

もちろん、この宿泊研修の恩恵を受けるのは新入生だけではない。2 回生スタッフも学ぶことは多かった。まず、大所帯の旅行を企画・運営できたことは、貴重な経験であった。一生のうちで、学生数約 120 人、スタッフや先生方を含めて総勢約 200 人の旅行を企画することがそうあるだろうか。個人旅行であれば行っていた場所、あるいは体験していたことが、大人数であるがゆえに実現できない場合が多々あった。その逆も然り。運営に関しても、思い通りにいかないことが多かった。全てが順調ではなかった分、柔軟な思考力が身に着いたように感じられる。そして、組織運営から得られたことも多かった。今年はスタッフ総勢 30 人、そのうち新入生の班に配属されたのは 24 人、裏方で執行部として動いていたのは 6 人という組織編制だった。部署別で動いており、また仕事内容が異なったため、情報共有や意識統一が難しかった。めいめい感じたことは異なるだろうが、「組織の中の自分」を考える良い機会だった。

来年度の宿泊研修は、昨年度のものとも、そして今年度のものとも異なるだろう。今年度は「ハードスケジュールにしたくない」という考えのもと、かなりゆとりを持たせたプランを作成したが、この点については、新入生の中で意見が分かれるだろう。毎年より良い宿泊研修を作り上げるため、「2 回生スタッフが新入生のときに問題に感じたこと」が改善されていくが、来年度はどうなるのだろうか？非常に楽しみである。

そしてこれを読んでいる方々には、今一度「自分ならどういう宿泊研修を企画するだろう？」と考えてみてほしい。和歌山を知ってもらうためには、どこで何を見せたり体験させたりするのか。私は、そこで直面する課題の解決方法を知れることが、和歌山大学観光学部の魅力のひとつだと考えている。これからも、実りある学生生活を送れるよう、座学やフィールドワークなどを有効活用していきたい。

## ■ Activity for Project「Learning about Experience-based Tourism from a World Heritage Area 」白川郷から考える観光の持続可能性

中岡　孝輔さん（学部 2 年生／大阪府立岸和田高等学校出身）

はじめに、本講義は世界遺産の現場から見た「持続可能な観光」の課題・可能性について検証する Activity for Project です。「持続可能な観光」とは地域の文化や自然、環境を消耗的に切り売りするのではなく、現在及び将来への影響を十分に考慮する観光の在り方を指します。

今回、私たちは世界遺産「白川郷」を訪れ、観光地でありながら、今なお多くの人が生活を営む居住地でもあるこの地域の現状や課題を現地の住民や観光客へのインタビューから調査、分析しました。

まず、現地調査を行う前の学習の一つとして、ドキュメンタリー番組を鑑賞しましたが、そのビデオを見て印象に残ったのは、白川郷の伝統的文化、「結」の存在でした。結とは豪雪地帯である白川郷で村民同士が助け合いながら生きていくための協働組織です。合掌造りの屋根の葺き替えを村民が総出となって行っている映像を見て、この村にとって結がとても重要な文化であることを感じました。

その後、実際に現地を訪れると予想していた通り、日中は多くの観光客がいて、とても賑わっていました。しかし、印象に残ったのは村内の時間帯による雰囲気の変化でした。日中賑わっていた街が、午後 5 時頃になるとお店は次々と閉まり、急に静かになります。元々、白川郷は岐阜県の一つの小さな村でしたが、数十年の間に有名観光地になったことで、多くの観光客が訪れ、街の様子は一変したのです。これは、私が現地で泊まった合掌造りの家に住まれている男性のお話ですが、「この街はここ数年で変わってしまった。観光地になってお客さんが増えたことで白川郷は活性化したが、観光業に時間を取られ、結の時間は無くなった。文化を守ることは大事だが、街が経済的に豊かになるためには仕方がない。」とのことでした。本来なら、白川郷の持つ伝統的

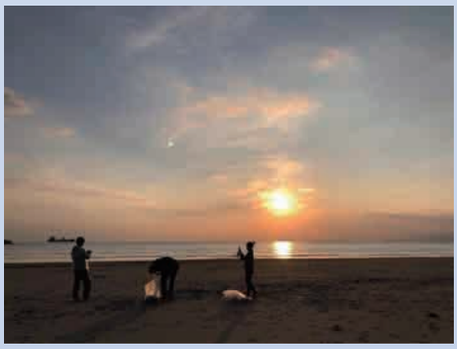
な文化が評価されて観光地になったはずが、観光業が原因でその文化が失われているのは深刻な問題です。

今回の調査を通して、白川郷の伝統的な文化を守っていくためには、住民と観光客双方が意識を変えて、観光の在り方を見直していくべきだと考えました。住民はその文化に対して改めて誇りを持って守るための行動をすべきであり、観光客は美しい景観に加えて、その伝統的文化についても理解し、尊重していくべきだと思いました。

最後になりましたが、本講義を通して得た経験や調査結果を今後のさらなる観光の持続可能性についての学習に活かしていきたいと思います。ご指導いただいたアビック先生をはじめ、調査にご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

## ■ Activity for Project「Anthropology of surfing: an ethnographic exploration of riding waves in Wakayama, Japan」での調査活動、サークル活動について

富原　千里さん（学部２年生／大阪学芸中等教育学校出身）



私が受けていた Activity for Project の授業内容はサーフィンの歴史や文化、地球でおこっている環境問題について英語で学ぶという授業でした。毎授業でサーフィンの歴史や文化、環境問題に関する本や記事を読むことやそれらに関する映画を鑑賞することが宿題で、授業中に学生それぞれが自主学習した内容を英語で発表します。また、授業はおよそ５ヶ月間ですがアダム先生の提案でエスノグラフィー（Ethnography）にも挑戦しました。エスノグラフィーは、はじめに議題を決め、実際にフィールドに参入するなかで人間の五感だけでなく人々の発言や行動、自分が感じたことや思ったこと、表面化した事実を細かくノートに書き表し集め、そこから考察を引き出すという調査方法のひとつです。研修では、徳島県へ行きました。普段と違う海でのローカリズムを感じることや慣れない高波でのサーフィン実習は緊張しましたが、クラスの友達と海に入ることで自然と恐怖心は消えました。海は誰のものでもなく自然のものですが、その海をいかなる時も守ってきた人がいて、どこの海でもローカリズムがあることを学びました。

次に、この授業にも関連しているサークル活動について述べたいと思います。和歌山大学公認サーフィンサークルではサーフィンだけでなく毎月ビーチクリーンアップ活動をし、ゴミを見れば時期によって人間が何をしているかが読み取れたりします。例えば夏だったら BBQ のゴミ、冬だったらカイロのゴミやホットコーヒーの容器などといったようにわかります。ペットボトルのキャップを海や砂浜に捨てるだけでキャップは波に削られ細々になり魚がプランクトンといっしょに食べその魚を私たちが食べているかもしれません。でも磯の浦海岸にゴミを捨てる人がいなくなったとしても、海や砂浜に限らず世界中のポイ捨てのゴミが漂流するのでゴミはなくなりません。

そして環境問題は海に関することだけでないので非常に複雑で全てを解決することはとても難しいですが、世界中の人が何か一つでも意識を向け環境のため・自分のため・未来のために小さなアクションを起こすと環境への負荷を抑えることができると思います。またサークルトリップでは奄美大島・嘉徳海岸へ行きました。嘉徳海岸は森、広い砂浜と海、そこに流れ込む川と、全てが揃い、絶滅の危機に瀕している固有種の生き物が棲む素晴らしい場所でキャッチネームのとおり、“ジュラシック・ビーチ” だと思いました。しかし、今この奇跡的な場所に巨額の予算を使う護岸工事が進んでおり、あるべき姿が永遠に失われようとしていました。津波災害のことや奄美大島のエコツーリズムを考慮した上でも防波堤を建設するより生態系を活用する防災・減災 (Eco-DRR) を促進すべきだと考えましたが、実際に地元の子供たちが防潮林・防風林・砂防林といわれるアダンの木を海岸に植える活動をすることや、change.org というサイトで署名を集めていても建設は進められている状態でとても残念です。授業で学んでいた “観光” “地域” “環境” “エコツーリズム” “スポーツツーリズム” などを座学で学ぶだけでなく、実際に現場を訪問して挑戦することができたので、一つ一つの問題を慎重に扱い学ぶことができました。

## ■「南信州・飯田フィールドスタディＥ」に参加して

山本　雄太さん（学部２年生／愛知県立豊橋東高等学校出身）

2019 年 8 月 17 日から 20 日までの 4 日間に行われた、南信州飯田フィールドスタディに参加しました。本プログラムでは、「都市農村共生型社会」のモデルの一つとして知られる長野県飯田市の農業・農村での取り組みについて、ヒアリングや意見交換といったアクションリサーチを通して学びます。またそれを手掛かりに、6 次産業化、販売戦略、流通、グリーンツーリズム、関係人口創出といった観点から、農業・農村の可能性を考えました。

全体で基礎講義を受けた後、テーマ別に班に分かれ、アクションリサーチを行いました。私たちの班は、農家民泊や着地型体験交流事業などグリーンツーリズムに携わる方々に聞き取り調査をしました。聞き取り調査を通して積極的に質問する姿勢と聞き取りの中から情報を得る力が身につきました。20 年間農家民泊に取り組む方の聞き取り調査では、農家民泊の取り組みが地域の活性化と地域住民の活気につながっていることが分かりました。様々な方との交流により農業や地域を見つめ直し、地域の良さを再認識することができたという声を聞いて、農家民泊の可能性を目の当たりにしました。

飯田フィールドスタディに参加してよかったことを３点挙げさせてもらうと、一つ目は実際に飯田市の農家の方のお宅に宿泊させてもらう点です。農家民泊を体験することで、地域住民に農家民泊の取り組みが広く理解されていることや、農家民泊の可能性を肌で感じることができました。

次に他大学の学生や教授、地元の高校生と一緒にアクションリサーチに取り組む点です。異なる学問的基礎を持つ３大学の学生、地元に住む高校生、農業高校の学生の意見を聞くことで、自分にはなかった考え方に触れたり、同様に自分が普段学んでいることを活かす機会があったことで、今後の大学での学びに、より一層邁進しようという意欲が生まれました。

最後に、プレゼンの経験を積めたという点です。最終日にアクションリサーチを踏まえた飯田市の農業農村ビジョンについて報告会が行われました。学んできたことをアウトプットすることや、各大学教授や飯田市長からの意見をいただくことでさらに学びを深め、また今後に活かせる大きな経験になりました。

私にとって飯田フィールドスタディでの 4 日間は大きな経験になりました。この経験を今後の大学での学びに活かしていきたいと思います。

## ■ 地域インターンシップ Local Internship Program（LIP）
## 「ねごろ歴史の丘巡りスタンプラリー帳作成」（和歌山県岩出市）
## ～「道の駅ねごろ歴史の丘」での利用者実態調査を通して～

井上　巧稀さん（学部２年生／石川県立金沢商業高等学校出身）

私たちが所属している岩出市 LIP は、本年度で 2 年目を迎えます。昨年度は初めて出来た LIP ということもあり、どのように PR していけば、岩出市の魅力を多くの方に知ってもらえるのか、模索しながら活動しました。本年度は昨年度の経験と反省を活かし、まずテーマを「道の駅ねごろ歴史の丘 2 周年イベントに向けてスタンプラリーを作成する」と明確にしてから、活動に取り組みました。

ねごろ歴史の丘の 2 周年イベントを成功させるために 7 月 27 日 ( 土 )、28 日 ( 日 ) に二日間かけて岩出市の道の駅ねごろ歴史の丘を調査しました。実際に成功させるといっても道の駅の利用客はどの世代の方が多いのか、どの交通機関を使い来店するのかデータが少なかったのでデータを集めるところから始めました。調査方法は来店客数のカウント、対面式のアンケート、ナンバープレート調査を実施しました。調査した時期はとても暑く、みんなで交代しながら調査を行いました。その結果、たくさんの方に協力していただいたおかげで 100 人以上の方がアンケートに答えて下さり、利用者の年齢層や行動の傾向を知ることが出来ました。この調査を基に、私たちも 2 周年イベントに参加し、県内で唯一の植物公園である和歌山県植物公園緑花センターとねごろ歴史の丘のスタンプラリーを作成することになりました。スタンプラリー用紙は一から自分たちで考えてデザインも含めてすべてを担当することになりました。現在は 11 月 23 日に行われる紀州根来寺かくばん祭りに向けて各班に分かれて準備を進めています。かくばん祭りでは

道の駅周辺の地域を盛り上げるためにこのスタンプラリーを通してより多くの方々に祭りに参加してもらおうと考えています。道の駅の方々と緑花センターの方々に協力して頂き、スタンプラリーを完成させるとビオラの花の苗を配布するなどの工夫も考えています。

今後の展望としてはこれまでの成果を 12 月に行われる成果報告会に向けてデータの分析や写真整理などを行い、発表することで、これからの岩出市の観光産業の発展に貢献出来ればと考えています。

私自身、昨年度から岩出市 LIP に参加していますが、本年度の岩出市 LIP は昨年度に比べて、テーマが明確だったこともあり、非常にやりがいのある活動となりました。本年度から協議会の皆さんのご協力により、多くの方の意見を聞かせて頂く機会や、地元の方と触れ合う機会にも恵まれ、岩出市の魅力をより深く知ることが出来ました。今後この経験を他の地域の観光を学ぶ際に役立てていきたいと思います。

最後になりましたが、岩出市産業振興課の皆さん、協議会の皆さん、ありがとうございました。

## ■ 地域インターンシップ Local Internship Program（LIP）「紀の川スイーツの開発」（和歌山県紀の川市）

### 井辺　この美さん（学部 2 年生／和歌山県立桐蔭高等学校出身）

私は和歌山大学観光学部の活動の LIP(Local Internship　Program) の中のひとつである紀の川 LIP に一回生の頃から継続して約 1 年半活動に参加しています。

私たち紀の川 LIP の主な目的についてですが、紀の川市はフルーツの栽培が盛んなことで県内外から認知されていると思います。しかしこのような産業があるにもかかわらず、紀の川市の人口は減少していくことは今後の大きな課題ではないでしょうか。紀の川 LIP では紀の川市内にあるカフェやスイーツ店と共同し、紀の川市の特産品であるフルーツを使用したスイーツを開発しています。こういった活動をすることによって私たちは≪若者やママ世代など様々な世代の人々にとって紀の川市のカフェが憩いの場・一つのコミュニティになること≫を目指しています。さらに、紀の川 LIP の活動を通してより多くの県内外の人たちに紀の川市について知ってもらい魅力を感じてもらう、住みたくなるような街づくりのお手伝いをできればなと思い活動を行っています。

実際の活動内容についてですが、昨年度の活動を紹介したいと思います。まず昨年度前期には、調査について何の知識も持っていない私たちは座学で統計学を学びました。その後自分たちでスイーツの名店に足を運び事例調査を実施したり、統計ソフトの SPSS を用いて自分たちなりに何がスイーツの高評価につながるのかなどを調査しましたが、SPSS での調査は自分たちが想定していたものとは異なる結果が得られるなど苦難が続きました。そこから紀の川市にある店舗を訪れて、何度か会議をおこなったのちに店舗での商品発売に至りました。自分たちの調査結果を踏まえて売れるスイーツ案を考えたのですが、コストの問題などを考慮しいくつか不採用になったものもあり、時間が限られている中での商品開発は思うようにうまくいかず葛藤が続きましたが実際に商品化され新聞などのメディアに取り上げられると、とてもやりがいが感じられました。

今年度は 11 月現在、新たに紀の川市内にあるカフェに店舗とスイーツの共同開発を行っております。紀の川 LIP の活動参加者の人数も昨年より 5 人増え現在は 12 人体制となり、苦難や葛藤は日々ありますが昨年度の活動より良いものにしていきたいと思っています。

# Topics　－過去のイベントとニュース－

## ■「和歌山大学観光学部　ミニ・オープンキャンパス in 東京」を開催しました！

2019 年 8 月 21 日 ( 水 )、フクラシア品川クリスタルスクエア（港南口）3 階会議室 F（東京都港区）にて、「和歌山大学観光学部 ミニ・オープンキャンパス in 東京」を開催しました。

満席で迎えた今回は、学部紹介のほか、模擬講義「民族文化と観光（吉田道代教員）」で大学の授業の雰囲気を味わっていただくとともに、本学部での学びや国内外での様々な活動、そして進路等について、在学生に直接質問できる「観光実践教育サポートオフィス presents　学生に聞こう！ ～和歌山大学観光学部で学ぶということ」を実施。4 年生 2 名、2 年生 1 名が自身の就職活動や大学での学びや学生生活、入試の体験談等を紹介しつつ、参加者と活発な意見交換を行いました。

https://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/news/2019061900066/

## ■ 文部科学省エントランス企画展示「和歌山大学がつくる新しい観光学」開催！

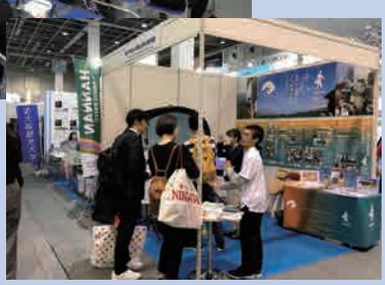
2019 年 10 月 1 日（火）～ 11 月 11 日（月）の約 1 か月間、文部科学省新庁舎（東館）2 階エントランスにて、企画展示「和歌山大学がつくる新しい観光学～観光による持続可能な発展を目指して～」を実施しました。

国立大学で唯一の観光学部として、地方自治体や企業、地域コミュニティとの地域連携、さらには UNWTO（国連世界観光機関）や PATA（太平洋アジア観光協会）、海外の大学との国際連携などを通じて取り組んできた地域資源の発掘・ブラッシュアップや多様な実践的教育活動の成果を展示するとともに、11 月 5 日（火）16 時からは、企画展示の関連イベントとしてセミナー「日本国際観光映像祭を立ち上げて～観光と教育への意義と効果について」を開催。2018 年度に東アジア初の国際観光映像祭を立ち上げた経緯や、この映像祭が日本の観光映像、さらには持続可能な観光振興にいかに寄与するか。また本映像祭の運営に学生が携わっていることから、その教育意義とはどのようなものかといった点を中心に、本学部の木川剛志准教授と、同 3 年生の関戸麻友さんが講演を行いました。

本学部の多彩な実践教育を首都圏で広く発信できたのではないかと思います。

http://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/news/2019092600034/
http://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/news/2019102900086/

## ■ 世界最大級の旅の祭典「ツーリズム EXPO ジャパン 2019 大阪・関西」に出展！



2019 年 10 月 24 日（木）～ 27 日（日）に、インテックス大阪で開催された世界最大級の旅の祭典「ツーリズム EXPO ジャパン 2019 大阪・関西」。初めて関西で開催されるということもあり、本学部も「大学・アカデミーエリア」に出展しました。

学部の全般的な研究・教育活動のほか、観光デジタルドームシアターや、2019 年 3 月に日本で初開催し、来年 2 月には第 2 回が開催される「日本国際観光映像祭」に関する紹介などを、学生と共に行いました。また、10 月 25 日（金）には本学部の出口竜也教授による「ツーリズム・プロフェッショナル・セミナー：和歌山大学観光学部セミナー」も実施。「和歌山大学観光学部が取り組む人材育成と地域連携」と題して、多岐にわたる専門分野の教授陣による最先端の観光理論と、LIP・GIP という国内外の地域を対象とした「実践型教育プログラム」など、多彩な観光人材の育成と地域連携の取組みについてお話ししました。

観光に関わる産業界の方々とのネットワークを広げるとともに、観光に関心のある多くの皆様に、本学の研究・教育の一端を感じていただけたのではないでしょうか。

http://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/news/2019091300041/

# Future Events　－今後のイベント紹介－

## ■ シリーズ企画展（第 3 回）：わかやま × 観光展「新宮市の魅力発信展」を開催します！

和歌山大学観光学部では、県内各市町村と和歌山で学ぶ学生たちとの接点となる場、より和歌山を知る場として、各市町村が有する産業・文化・人材など多彩な観光資源を展示するシリーズ企画展「わかやま × 観光展」を西 4 号館の多目的スペースで開催しています。

第 1 回の太地町（2019 年 10 月）、第 2 回のみなべ町（2019 年 11 月）に続いて、第 3 回は新宮市。世界遺産のあるまち「新宮市」についてや新宮市魅力発信女子部推薦の「地域で活躍する女性」など、新宮市の魅力を紹介していただきます。是非この機会に和歌山各地の観光資源となりうる様々な魅力を体感してください。

展示期間：　2019 年 12 月 13 日（金）9 時～ 2020 年 1 月 16 日（木）15 時
展示会場：　和歌山大学西 4 号館　多目的スペース
主　催　：　和歌山大学観光学部、新宮市
※ 交流イベントや詳細情報は、観光学部 HP（http://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/）で後日お知らせします。

※ 過去の展示についてはこちら
http://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/news/2019092400023/　（太地町）
http://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/news/2019102900048/　（みなべ町）

編集・発行　（2019 年 11 月発行）
和歌山大学 観光学部 観光実践教育サポートオフィス
〒640-8510　和歌山市栄谷 930　和歌山大学西 4 号館 K216 室、K116 室
TEL/FAX　073-457-8553　／　E-mail　tourism-er@ml.wakayama-u.ac.jp　／　URL　http://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/